

I am Jazz! (ジャズ・スーパー列伝)

ジャズの発展に貢献し、その歴史に名を刻んだ名プレイヤーたち。その人生は、楽器が異なる如く千差万別。このコーナーでは、そんな個性的なジャズマンたちの功績を称え、生き様を紹介することで、より多くの人々にジャズの素晴らしさを伝えていきたい。

Vol. 26 Kenny Burrell 【ケニー・バレル】 ～ブルース・フィーリング溢れる名ジャズ・ギタリスト～



Photo by Tom Marcello

Profile

1931年7月31日米国ミシガン州デトロイト生まれ。本名は Kenneth Earl Burrell。父親はバンジョー、マンドリンとウクレレを演奏し、母親は歌手でピアニスト、2人の兄もギターを弾く音楽一家で育ち、12歳の時にギターを弾き始める。当時のアイドルは、チャーリー・クリスチャン、ジャンゴ・ラインハルト、ウェス・モンゴメリーだった。ウェイン大学で音楽を学んだ後も地元デトロイトで活動を続け、大学在学中の51年にディジー・ガレスピー・セクステットのメンバーとして初レコーディングを果たす。大学卒業後の55年に、ハーブ・エリスの代役としてオスカー・ピーターソン3に参加しツアーに出る。56年にニューヨークに進出し、同年5月にブルーノートより初リーダー・アルバム『イントロデュース・ケニー・バレル』をリリース。その後、ベニー・グッドマンのグループ等を経て、59年に自己のコンボでニュー・ポート・ジャズ祭に出演。そのブルージーなギター・プレイで人気を呼び、多くのセッションでひっぱりだことなり、ジミー・スミス、ジョン・コルトマン、ギル・エヴァンスをはじめ、数多くのミュージシャンと共演。50年代にはブルーノート、60年代にはヴァーヴを中心にレコーディング活動を行い、独自のスタイルを確立。70年代初頭にはニューヨークでジャズ・クラブ「ギター」を経営。その後、ロサンゼルスに移りUCLAで音楽やデューク・エリントンについて教鞭をとる等、ウエスト・コーストを中心に活動。自己のグループを中心にライブ活動やレコーディングを続け、80歳を迎えた現在もそのブルース・フィーリングたっぷりのギターは健在。UCLAでは音楽と民族音楽学の教授を務めており、クールでニヒルでジェントルな佇まいは今も変わらない。

モータウンのジャズ魂～ケニーの初リーダー・アルバム！



イントロデュシング・ケニー・バレル ケニー・バレル

(EMI ミュージック: TOCJ-8603)

ケニー・バレル (g)、
トミー・フラナガン (p)、
ポール・チェンバース (b)、
ケニー・クラーク (ds)、
キャンディド (perc)

1. ジス・タイム・ザ・ドリムス・オン・ミー
2. フーガ・ン・ブルース
3. タキーラ
4. ウィーヴァー・オブ・ドリムス
5. デライラ
6. リズモラマ
7. ブルース・フォー・スキーター

1956年に地元デトロイト（モータウン）時代からの盟友トミー・フラナガンと共にニューヨーク進出を果たしたケニーが、同年5月に吹き込んだ初リーダー・アルバム。トミー・フラナガンの他、ポール・チェンバースもモータウン出身と気心の知れた同郷の仲間たちと共にリラックスした雰囲気の中で、フレッシュさとケニーらしい都会的センスを感じさせるアルバムに仕上がっている。キャンディドのパーカッションも何ともいい味を出しており、「リズモラマ」ではケニー・クラークとのデュオが楽しめる。そして、やはりトミー・フラナガンのピアノはいつ聴いても美しくて最高！ ケニーとポール・チェンバースとの相性も抜群で、モータウン・ジャズの底力を感じる傑作に仕上がっている。

ケニー・バレルの人気を不動にした永遠の名盤



ミッドナイト・ブルー ケニー・バレル

(EMI ミュージック: TOCJ-8515)

ケニー・バレル (g)、
スタンリー・タレントイン (ts)、
メジャー・ホリー Jr. (b)、
ビル・イングリッシュ (ds)、
レイ・パレット (conga)

1. テトリス・コン・カーネ
2. ミュール
3. ソウル・ラメント
4. ミッドナイト・ブルー
5. ウェイヴー・グレイヴィー
6. ジー・ベイビー・エイント・アイ・グッド・トゥ・ユー
7. サタデー・ナイト・ブルース

このタイトルといい、アルバム・ジャケットといい、ケニー・バレルを聴くなら絶対に外せない一枚。1963年にブルーノートで吹き込まれたケニー・バレルの代表作で、ケニーのギターの魅力満載、ピアノレスによる最高にブルージーなアルバム。ゆったりめのナンバーが多いが、特にタイトル曲の「ミッドナイト・ブルー」、「ジー・ベイビー・エイント・アイ・グッド・トゥ・ユー」に「サタデー・ナイト・ブルース」がいい。アルバムを通して、スタンリー・タレントインのテナーも雰囲気抜群で、レイ・パレットのコンガの音色もより一層ブルージーな都夜の夜を匂わせる。ベースはメジャー・ホリー Jr. だ。哀愁たっぷり、むせび泣くケニーのギターは正にブルース。お世辞抜きにカッコいいアルバムです。

ケニー・バレルのクリスマス・アルバム～隠れ名盤！



Have Yourself A Soulful Little Christmas Kenny Burrell

(Verve) [Import CD]

Kenny Burrell (g)、etc.

1. The Little Drummer Boy
2. Have Yourself A Merry Little Christmas
3. My Favorite Things
4. Away In A Manger
5. Mary's Little Boy Chile
6. White Christmas
7. God Rest Ye Merry Gentlemen
8. The Christmas Song (他、全12曲)

1966年にシカゴで録音され、同年 Cadet Records よりリリースされたものの、92年に再発されるまで陽の目を見ることがなかったケニーのクリスマス・アルバム。リチャード・エヴァンスとエスモンド・エドワーズがアレンジを担当し、「The Little Drummer Boy」「White Christmas」「The Christmas Song」「Silent Night」をはじめ、お馴染みのクリスマス・ナンバーを中心に全12曲を収録。アレンジも素晴らしい、アルバム全体にケニーらしい都会的でロマンチックなクリスマスの雰囲気が漂っている。「Twelve Days of Christmas」はストリングスをバックに心地良いケニーのギターが響き、ラストを飾る「Merry Christmas Baby」で聴けるケニーのブルージーなギターも最高！

クールでニヒルでジェントルな

ケニーのギターに初めてシビれたのは、ケニーと同郷モータウン出身でモダン・ジャズの黄金時代を駆け抜けた偉大なベースマン、ポール・チェンバースが1957年に録音した名盤『ベース・オン・トップ』での名演だった。特に「ディア・オールド・ストックホルム」でのむせび泣くようなギターは最高だった。その後、90年代半ばにNY「ヴァレージ・ヴァンガード」のバーで初めて生のケニーに会った。僅かな会話を交わしただけだったが、にこやかに紳士的な態度に人知れず感動した。勿論、その晩のライブも最高で、相変わらずのブルージーなケニー節も絶好調だった。ケニーといえば、あのBB・キングも「マイ・フェイヴァリットだ」と称え、ジミヘンにさえ「あのサウンドこそ、俺が求めているもの」と言わしめるほど、ジャンルを越えて多くのギタリスト達に影響を及ぼしている。そのギターの音色には彼の人格も現れているようだ。

80歳を迎えた今も健在のケニー

7月31日に80歳を迎えたケニー。7月28日から誕生日当日の31日までの4日間、カリフォルニア州オークランドにあるジャズ・クラブ「Yoshi's」で80歳の記念ライブが行われた。「Yoshi's」では75歳の記念ライブも行われ、CD化されている。

ケニーのシグネチャー・モデル

ケニー愛用のギターはギブソン (Gibson) の「ES-175」や「L-5」であったが、さすがに偉大なジャズ・ギタリストだけあって自身のシグネチャー・モデルのギターが作られている。ギブソンのブランド、ヘリテージ (Heritage) から「The Super KB」というシグネチャー・モデルが発売され、同じくヘリテージからケニー自身が監修を行った「The Kenny Burrell」というシグネチャー・モデルのギター・アンプも発売されている。